水の文化

その先の藍へ

水の文化 February 2017 No.55

水の文化 55 February 2017

特集 その先の藍へ

ミツカン 水の文化センター

ミツカン 水の文化センター

表紙：染め場で藍色に染め上げられたストールが柔らかな光に透ける。寛政年間（1789-1801）創業の紺屋「日下田（ひげた）藍染工房」は、タデ科の一年草「蓼藍（たであい）」の葉からつくった染料「蒅（すくも）」を発酵させて染めるという、昔ながらの方法を今も守る（撮影：川本聖哉）

裏表紙上：蒅をつくる土間の作業場「寝床」で、発酵を促すために水をかけるBUAISOUの結城研さん。4～5日ごとに水をかけて混ぜ合わせては積み上げる「切り返し」など、蒅づくりにはさまざまな手作業が必要だ（撮影：鈴木拓也）

裏表紙下：ベロ藍（プルシアンブルー）という人工絵の具が大量に輸入されるようになった文政年間（1818-1830）、藍色の微妙な濃淡で刷る「藍摺絵（あいずりえ）」が登場する。　歌川国貞『元柳橋　雪の光景』（北海道近代美術館蔵）